

森教二のライフストーリー研究

——和歌山県における生活綴方教師の一典型——

The life-historical approach to “Kyoji MORI” :
a teacher of elementary school in Wakayama Prefecture.

船 越 勝 森 教 二
Masaru FUNAGOSHI Kyoji MORI
(和歌山大学教育学部) (元和歌山市立野崎小学校)

2011年8月19日受理

I 問題の所在

国際的な学力調査の結果、日本の子どもたちの学力をめぐる問題が教育「改革」の焦点の一つとなり、現在、様々な議論や試みが行われている。筆者は、従来の日本の子どもたちの学力を「日本型学力」と呼び、PISA調査などに示されているグローバル・スタンダードとしての学力像と比較したときに、きわめて特殊な特徴を持ったものとして、次のような性格を指摘している¹⁾。

- ①「できる」けど、すぐに忘れる
- ②「できる」けど、なぜ「できる」かが「わから」ない
- ③「できる」けど、勉強は嫌い
- ④「できる」けど、自信がない、自分が嫌い
- ⑤「できる」けど、まわりの社会や世界に対する関心はない

こうした「日本型学力」の問題は、学力形成において、何より子どものことばの力や、その獲得のあり方が密接にかかわっていると言える。そうした意味で、言葉(言語)と学力や教育の関係をどうとらえるかは、焦眉の課題の一つである。

こうしたことばの教育とそのことを子どもの実生活や生き方と結びつけた教育実践として、生活綴方²⁾があり、今日この生活綴方についての関心が改めて広がっている。和歌山県でも、生活綴方及びそれにもとづく教育実践を指す生活綴方教育は、自主的・民主的な同和教育実践や運動と結びつきながら³⁾、先進的な取り組みが展開されてきた。たとえば、戦後新教育の時代において、コア・カリキュラム運動が持つ牧歌的な性格を批判した、民教・民教協の運動⁴⁾のなかから生まれたものに、紀南作文教育研究会の実践がある。この紀南作文教育研究会の実践は、貧困問題に塗れた紀南性の生活台にあって、それに負けない子どもたちを育てた教科指導や学級づくりなどの実践が数多くある⁵⁾。また、同様に、和歌山県全体に大きな影響を与えた生活綴方の実践として、御坊小学校の学年新聞の取り組みである『大地』⁶⁾の実践もある。こうした紀南作文教

育研究会など紀南地区の実践は、和歌山県の生活綴り方の「典型」として、県内全域に大きな影響を与えるとともに、全国教研などの全国的な教育研究の場にも、発信されていった⁷⁾。さらには、このような和歌山の「典型」実践としての紀南作文教育研究会の実践については、河原尚武氏の研究や宅田紀子氏の研究などすぐれた研究がこれまでも発表されている⁸⁾。

しかし、和歌山県での生活綴方の実践は、紀南地区の実践だけではなく、和歌山市や海草郡などの紀北地区、さらには、同じ紀北地区でも、紀ノ川筋の橋本市・伊都郡などでも固有の取り組みが展開された。そのおおよその取り組みの素描については、小川真知子氏の研究があるが⁹⁾、まだ端緒に付いたところである。各地域での固有の取り組みというローカリティのレベルでの解明を踏まえて、和歌山県全体での生活綴方の教育実践と教育運動の全体像を明らかにするためには、とりわけ紀北地区での取り組みを解明することが大きな課題になっている。

こうした紀北地区、とりわけ和歌山市での生活綴方の教育実践と教育運動の展開を明らかにする上で、キー・パーソンの位置にあるのが森教二氏である。森氏は、和歌山市立野崎小学校を初めとして、市内5校に勤務をし、退職後は、和歌山大学教育学部で講師を務め、後進の育成に力を注いだ。また、現職の間は、生活綴方サークルである「てのひら作文の会」を組織するとともに、和歌山県教育サークル連絡協議会などの事務局も勤め、長年和歌山県の教育実践・教育運動をリードする立場にある人物である。

こうした森教二氏のライフストーリーを検討する意義は、次のような点にある。

第一は、生活綴方及び生活綴方教育に教師生活のすべてを捧げた森教二氏のライフストーリーを検討することにより、森教二氏の生活綴り方教師としての固有性ととともに、和歌山県の生活綴方教師の教育実践の「典型」性が明らかにできることである。

第二は、これまでの先行研究で必ずしも十分明らかにされていない、和歌山市を中心とした紀北地区の生

生活綴方の取り組みが、理論・実践・運動の3層において明らかにできることである。

第三に、第二の意義ともかかわるが、和歌山県の生活綴方の教育実践や教育運動が全国の取り組みに対する立ち位置と、その持っている独自性を究明できる可能性である。周知の通り、わが国の生活綴方の教育実践と教育運動の中核的な担い手である日本作文の会は、教育の現代化の取り組みとのかかわりで、1962年方針¹⁰⁾で、生活指導の重荷を下ろし、国語科文章表現指導の軸足を置くこと、1950年代に用いられた「生活綴方教育方法」という用語は用いないことなどを決定したが、その方針に反して、重荷を下ろさず、「生活綴方教育方法」という用語を積極的に用いてきた府県に、山形、京都、大阪などと並んで、和歌山県があった。また、この問題は、1970年代に入ってから、野名一田宮論争¹¹⁾として、改めて問題化されるが、生活綴方の根本問題の一つである。

また、こうした状況のなかで、和歌山県において森教二氏は、日本作文の会との関係を切らず、役員なども務めたそうであるが、62年方針を批判しつつ、会員であり続けた森氏のスタンスは、非常に興味深い。それは、いかなる問題意識からなのであろうか。

第四に、和歌山大学における生活綴方などの教育サークルの実態が明らかにできることである。こうした教育サークルや全国教育系学生ゼミナール¹²⁾などでの学習運動が、そこで学んだ学生たちにどのような教師としての力量を形成したのかは、大学での学生の文化活動・自治活動の研究だけでなく、教師教育研究としても大きな課題である。

このような4つの資格から、本論文では、森教二氏の教師のライフヒストリーについて検討を行う。なお、紙数の関係から、今回は、野崎小学校の実践までを対象にする。(船越)

Ⅱ 森教二のライフヒストリー

1. 時代区分

時代区分	西暦	日本・世界の動き	ライフヒストリー	特徴的な体験とその要因・結果
I 期	1942		誕生	健康優良児。 3歳頃から病弱、医者通いの生活。 負われていたために父親の首筋ばかりを眺めていたように記憶している。
	1947		幼稚園入園	キリスト教系の幼稚園2年。 記念写真にはいつもひっこんでいる。登園をいやがり、幼稚園の前の上り坂で祖母をこまらせた。
	1949		小学校入学	1年生の秋、友だちとピストルの撃ち合いをしていて、小田井用水にまっさかさまに落ち、額から大量の血を出す。 鼻が悪く、いつも鼻水を出していたために、3年生の時、隣の組の女性教師に、「ハナタレ」と言われたことが、今も記憶している。
	1955		小学校卒業	
	1958		中学校卒業	1年生から相撲部に入部。勉強とクラブ活動を両立できた。
	1958		高校入学	高校の小学区制から中学区制に変わる年、地元ではない伊都高校を受験。汽車通学を始める。 音楽部とESSのクラブに入る。
	1960		高校卒業	旧一期の大学受験のため、卒業式には出ない。
	1961		浪人生活	金沢大学、和大経済不合格のため、京都で1年間浪人生活。 葵祭、祇園祭、大文字焼き、時代祭など、京都の生活を堪能する。
II 期	1962		大学入学	和歌山大学入学 教育科学研究会に入部 生活綴り方班に入る。 1年の春 近畿ブロック生活綴り方合宿研究会に参加。生活綴り方のリアルズムに触れる。 近畿教育系学生ゼミナール。 2年、生活綴り方研究会として独立。(初代部長) 近畿ブロック綴り方合宿に、佐々木賢太郎先生が参加。(加太、青年の家) 田辺市元島での合宿に藤田五与先生が講師として参加される。 全国教育系学生ゼミナールが山口大学で開催。矢川徳光先生の記念講演。 毎年、近畿教育系学生ゼミナールと全国教育系学生ゼミナールに参加。 卒業論文「リアルズム綴り方教育論」、村山俊太郎、荒木ひで、佐々木昂、たちに惹かれ、北方の綴り方教師の姿をつねに追い求めるようになった。 近教ゼミなどでは、綴り方の歴史、特に、北方性教育運動のレポートや、実践分析「体育の子」(佐々木賢太郎)「やまびこ学校」(無着成恭)、「大地」(御坊小学校5年生の学年だより)などなどの実践分析をした。 卒業論文では、佐々木昂の「リアルズム綴り方教育論」にを学び、今日に広げ、書くことの意義を書いた。

II 期				山田昇先生が赴任され、私一人が先生の「教育史特講」を聞き、胸を熱くして講義を受けたことを今もその時の気持ちを覚えている。
	1966		大学留年	微分積分学の単位が取れなくて、留年する。その1年間に小学校免許2級を取得する。
III 期	1967		野崎小学校赴任	<p>教員はじめての学校。・4年生担任。 女の子一人に対する差別(今でいういじめ)に苦しむ。学級崩壊状態のクラス。10.26の2時間ストライキに参加。全国同和教育研究大会(岡山)に参加。分科会で、一番に発言。 和歌山県教職員組合の県教研に子どもたちの詩を発表。 新任教師の会(研修で1か所の学校にあつま)でお茶を飲みながら、子どものこと、学校のこと、同僚のことなどを愚痴る。それが、作文教育のサークル「てのひら作文の会」となる。 ・4年担任。 民間教育研究集会夏の集会、全体会で、「新任教師1年間の歩みをふりかえって」を報告。 この頃から、県民間サークルの事務局に入る。(吉川先生、楠本先生、中山先生、宮本先生、岡本先生たちが事務局にいた。) 市教組青年部常任。 ・2年担任。 県教組青年部常任。 教研担当。青年部教研を開催(大槻 健先生の記念講演) 結婚。 ・4年担任。 教研・文化担当。青年文化祭を開催。(児童婦人会館の会場確保)映画「霧の旗」上映。 はぐるま研究会「南近畿大会」(県和商)に参加。 ・5年担任。 ・3年担任。 ・3年担任。特殊学級を来年度開設するというので、和歌山市内の学校を視察し、私たちの考える特殊学級像を出し、12月に校長から、「来年度の特殊学級の担任になってほしい」ということを告げられ、笠田から和歌山に移住してその期待に応えようとしたが、内示で転勤になり、市教育委員会をあいにて、「不利益提訴」をしてたたかったが、うやむやのうちにそのままになってしまった。</p>
IV 期	1974		松江小学校へ転勤	<p>・4年担任。 ・2年担任。 ・1年担任。初めての1年担任。体当たりの取り組み。「ひまわりつうしん」発行。 ・2年担任もちあがり。 「綴り方と子ども」(『綴り方の教室』低学年)〈部落問題研究所) ・1年担任。「ひろば」発行。 近畿・東海兵庫(宝塚)大会直後狭心症の発作、引き続いて、10月から4カ月「急性肝炎」で入院。 ・2年担任、持ち上がり。親子文集発行。 回覧ノート「ひろば」をつくり、父母の中をまわるノートに様々な問題や悩み、話題を書いてもらう取り組み。 「父母よ、わが子育てを語れ」を「月報」(民研発行)に掲載。</p>
	1980		木本小学校へ転勤	<p>・1年担任。 ・1年担任。 この年の秋に、産休講師の体罰問題が起こる。</p>
V 期	1982		楠見小学校へ転勤	<p>・2年担任。 4月1日の1日ばかりで担任をきめるための、人対の交渉と希望を叶えられなかった先生への校長の説得。人対はコマをさわらないのを原則にしていた。夜11時を過ぎても、担任は決まらない。解散。 4月2日、担任発表。職員室に拍手が起こる。それからが大変。教務主任の互選。学年主任の互選。現職教育主任の互選等がつづく。 教職員93名。61学級。新採用教員17名。青年部の教員(30歳未満)53名。 職場としての、新しい先生を歓迎するのをバスツアーとして明日香までいく。 教育実習生を担当する。 Mくんのこと(月報) ・1年担任。 ・6年担任。 いじめ問題に悩む。 ・1年担任。 「お前は逃げたな」と藤田五与先生に叱責される。 『道徳教育実践の探求』(あゆみ出版) ・同和推進教員。</p>

V 期			学校だより90号発行。 ・同和推進教員。(和歌山市会長) 学校だより150号発行。 ・2年担任。 ・2年担任。
	1990	雄湊小学校へ転勤	・2年担任。 「現職教員の実地指導」として、和歌山大学の非常勤講師となり、「道徳教育論」の5～6時間、碓井岑夫先生の時間をいただく。 ・2年担任。
VI 期	1992	野崎小学校へ転勤	・2年担任。 ・2年担任。 ・大学院。 ・1年担任。 ・3年担任。 ・2年担任。 ・2年担任。 ・2年担任。 ・2年担任。ひとりの保護者に8時間の軟禁状態にされ、「うちの子に怪我をさせないという念書を書け」と校長にせまる。
VII 期	2001	退職	退職と同時に、和歌山大学で「道徳教育論」を後期全部の時間と、「現代教師論」と、「教育学演習」を年間の3コマを担当。 県立高等看護学院。 大阪明浄大学。 県立なぎ看護学校。 等で非常勤講師を続けている。 また、退職と同時に、「和歌山マジシャンズクラブ」に入会、今日では、事務局長・講師をしている。 そして、現在、和歌山市地方教育互助会の事務局長をしている。 県サークル連協の副委員長兼事務局長をしている。

2. 第I期 誕生から大学入学まで

——人見知りの強い、けれど、ごく普通に勉強する子ども時代——

(1)誕生から小学校入学まで

1942年(昭和17年)4月3日、伊都郡かつらぎ町に次男として生まれた。生まれた頃はよく太っていて、当時「健康優良児」と言われたそうである。

物心ついた頃から、身体が弱くなり、いつも医者通いをしていた。父親におんぶされ、ねんねの中で、父親の首筋ばかりを見ていた記憶がある。精をつけるために、「まむし」を焼いたものを食べさせられた(案外香ばしいものであった記憶がある)経験は、今も忘れられない。

3歳になった時、長男(兄)が、家の横を流れている小田井用水にはまって水死した。1945年8月15日のことであった。

それ以後、戸籍上は次男であったが、常に長男として扱われていた。

4歳で聖心幼稚園に行き始め、時々記憶では、母方の祖母に送ってもらったが、なだらかな幼稚園までの坂道で泣いて祖母をこまらせたということも、鮮明に記憶に残っている。幼稚園で遊んだものは今唯一覚えているのは、畳の部屋で「だるまおとし」をしたことぐらいである。記念写真を撮った時、写真屋さんがピカッと光らせたマグネシウムも昨日のように覚えている。記念写真を見ても、友だちと同じように並んでいても、いつも誰かのかげにもたれかけたり、堂々と

している姿は見あたらない。

そういう子どもであったようだ。

(2)小学校時代

昭和24年4月、笠田小学校に入学。担任は、きれいな金沢先生という若い先生であったが、かわいがってもらったという印象はない。文字が下手で、先生が丸をしている机の周りにあつまっていた女子が、私のノートを丸する先生に「一重丸に点」というと、先生も、私のノートに丸を一つとその中に点を打つのをぼんやりと眺めていた。ぼんやりと眺めていたのに、そのことが、今も鮮明に覚えている。

寒い冬でも、水で教室や廊下を黙々と掃除をし、その時の井戸水の何と暖かったことか。

秋の収穫の頃、近所の仲間とピストルの撃ち合いをしていて、いつの間にか小田井用水に真逆さまに落ち、水の中で泣いていて、頭から水がどんどん流れてくるので、手で拭くと手が真っ赤になり、大声でなくと近所のおじさんが助け出してくれた。額を何針か縫ったが、額のことであるので、なかなか縫いにくいようであった。小田井用水は夏場の水稻を育てる時期は水が流れ、秋以降は水は流れていない。

1年生の終わりの日、男女何人かで、着物を着た金沢先生と写真を撮ったのがこのこっているが、特別自分たちのグループだけの写真ではなく、それぞれのグループでとったものではないかと思っている。先生は、結婚をするということで、先生をやめてしまった。

2年生は、阪口良平先生で、先生を絵に描いたよう

な先生であった。ほめられもせず、2年生も普通の子どもであった。

3年、4年の先生のことは、記憶にはのこっていない。ただ、3年生の時、廊下で隣の学級の年配の女の先生が、私が常に鼻水を出していたので(蓄膿症のため高校2年の時と27歳の時と2回手術をした)、その先生が、「ハナタレ。」と言ったのをずっと覚えている。子どもながら、この2年間のことは何も覚えていないけれど、この女教師の一言だけは、忘れることはできなかった。いわんや、先生に抗議するようなことは、さらさらできなかったし、しようとも思わなかった。

5年生の担任は年配の男性教師の実宝先生であった。この先生との思い出も別に何も残っていない。ただ、先生のご家族が亡くなったというので、紀ノ川の向かい側の和歌山寄りの遠い所まで歩いてお葬式にいったことは、どうしてかそのことだけはおぼえている。

私が3年生の頃に、近所にキリスト教の協会を建設していた。建設現場で大工さんたちが帰ったあと、友だちと枠組みだけの家の中などで遊び回った。そして、教会ができた時から「日曜学校」へ行き、歌を歌ったり、イギリスから来ていた牧師さんの手品を見せてもらったりしていた。後々、私が教師になってからも、この牧師さんから教えてもらった手品をいくつも覚えていて、子どもたちにしてあげていた。そのことが、今日のマジック好きの元にあるのではあるまいか。

あるとき、何かのイベントがあって、私は牧師さんから、「野口英世」の伝記をいただいた。私は分厚い本らしいものを最後まで読んだのは、この「野口英世」が初めてであった。その影響か、いつの間にか、将来、医者になろうかとさえ考えたこともあった。

6年生は田中実先生で、若い澁刺とした先生であった。社会科の学習で世界の産物をユーラシア大陸をフリーハンドで書き、そこに産物名を書き入れていったことや、発電機を作って手回しで電気を起こし、ロープウェーを動かす装置を理科好きの子どもたちとつくっているのを遠くから見ていたように思う。

私が授業中に、机の上につぶせになって、寝てしまった時、「おい、森君、どうした。」とおこしてくれたこともあった。まだ木造校舎で、教室の後ろの掃除道具入れの上に乗る、その上の天井板を動かすと、ぽっかりと天井に穴があき、そこから天井裏へのぼっていき(2階建て)太い梁を伝って隣の教室の上まで行ったりし、少しずつつやんちゃもできるようになってきた。

そのころ、私は模型飛行機に興味をもち、設計図をみながら、ひごを曲げ、ヒューム管でつないでゴムの動力飛行機(私の好きなタイプは「スカイホース」という名前の飛行機)をむしむしと作り、部品がなくなれば、それを売っている文房具店へ買いにも行けるようになった。完成した飛行機を持って、放課後、運動場の端から端まで飛ばせるように何回も飛ばしたもので

あった。翼が破れればのりをべたっと付けなくて貼ることもくふうしてできるようになっていった。

この田中先生が、私が和歌山大学に入学したことを新聞で知ってくれて、わざわざ家までお祝いを言いに来てくれた。

小学校生活で、全校集会では、「国旗に注目」というのがあったり、式では「君が代」を歌ったり、卒業式には紅白のおぼろ饅頭をもらって帰るのがたのしみだった。

後から思えばそうだったんだと思うことがある。朝鮮戦争がおこった時、全校の子どもが講堂に集められ、校長先生が「大変なことが起こった」というような話をしたことがあった。それが、朝鮮戦争のことかなと、後後に理解できたことであった。

5年生の頃、地区子ども会で、冬休み中に夜回りをした。「マッチ一本火事のもと」「まりをけてもこたつをけるな」とか言いながら、町内をかまぼこ板をたたきながら回っていたとき、一軒の家の風呂の焚き口から火が出ていて今にも火事になりそうなところを私たちのグループが発見し、中学生が風呂の水で消したということがあった。全校生徒の前で、中学生と何人かの友だちが、町長、警察署長の二人から表彰され、賞状と金一封(300円だったか)と赤黒のシャープペンシルをもらった。

お金は親にあずけたが、シャープペンシルを学生服の胸のポケットに入れて自転車で走り回っている間に無くしてしまった。

父は商売が好きで、醤油と酢とソースの小売りをしながら百姓をしていた。母は主に百姓をしていた。祖父はまだ健在で、山奥の方へ行って、竹の皮を買いに行き、1年分の小遣いを儲けていた。私は百姓を手伝うと、明るく日は熱を出して学校を休むことが多かった。段々と農業を手伝うことをすすめないで、その代わり勉強を十分にさせてくれた。高学年になるにつれて、何日かに1回位の頭痛に悩まされ、富山の置き薬の世話になっていた。

私はあまりしゃべらない子どもであった。お客さんが来ても、「いらっしゃい」とは言わないし、欲しい物があっても、自分から「あれが欲しい」というようなことは、特に父親には言わなかった。煙たい父親であった。だから、父親も「お前は物言わずだ。人がきても挨拶もしない。」とよく言われた。そう言われると、益々、物を言わない子どもになっていった。後々、教師になった時、親が子どもに言い続けたように子どもは育つということを実感をもって保護者に体験とともに話すことができた。

三橋美智也の曲が好きで、だれも居ないところで、良く口ずさんでいた。祖父が浪曲が好きで、町で一つの映画館で実演をすることがあり、よく連れて行ってもらった。歌手もよく来て実演をしていた。藤島たけ

お 灰田克彦 五月みどり マヒナスターズ 松山恵子などがよくきていて、何度も見に行った。

勉強も普通にでき、物静かな特徴のない子どもであった。

(3)中学校時代

中学校では、勉強もある程度できる子になっていた。1年生から相撲部に入り、放課後から日が暮れるまで、相撲をとっていた。夏の頃は、学校から1kmくらい離れている紀ノ川へ「まわし」を巻いたまま泳ぎに行き、重い水のたっぷり染みこんだまわしのまま学校に帰ってきた。

よく覚えていることがいくつかある。一つは、国語の時間に、菅野先生が、芭蕉の句だと思いが(不確か)「おうおうと呼べどこたえぬ雪の門」という句の解釈をしてくれた時、黒板をどンドン叩いて、「おーい、おーい」と叫んでいる様子を見せてくれた。何日かして、どこかの教室の黒板をどンドン叩く音が聞こえたとき、みんなは「雪の門」の句の授業をしているのだなど、顔を見合わせた。また、菅野先生は、授業の初めと終わりには、必ず、「右手を挙げたら形容詞、左手を挙げたら形容動詞」と言って、何回も右手や左手を上げ下げするたびに、生徒は「かろ かっ く い い けれ」「だろ だつ で に だ な なら」といわされ、形容詞の連用形は二本立て、形容動詞の連用形は三本立てとあって、身振り、手振りで、練習させてくれた。今もこの活用形は忘れられない。もう一つ、菅野先生は、日本文学史をきちんと教えてくれた。「大和 奈良 平安 鎌倉 室町 江戸 明治 大正 昭和」の時代区分と、その時代の作品と作者を解説してくれて、自由に自分でも研究して、レポートすると、評価がきちんと書かれていた。意識はしていなかったけれど、日本文学に目覚め始めたのかも知れない。

二つめは、相撲部の練習中に、友だちに「かんぬき」をしたとき、肩を抜いてしまい、翌日になって、痛いというので、昼休みに整骨院(相撲部の先輩の家)へ連れて行ってやり、戻って来たときは、もう午後の授業が始まっていた。後ろに1時間ちかく立たされた時、数学の授業をしていた。丁度、開平(筆算で、ルートを開いていく計算)の授業だった。今でも、その時間とルートが重なって表れてくる。

もう一つは、その頃、「職業・家庭」という教科があり、女子は「家庭」を男子は「職業」を学んだ。教室では、展開図の書き方や、肥料の三要素を習い、2時間続きの授業だったので、校庭でドーナツを作ったり、また、昼休みも合わせて、紀ノ川の川原へ飯ごうをもっていき、みんな一つだけ缶詰のおかずをもっていき、ご飯を炊いて食べるという、のどかな中学校生活であった。

1年生の始まりの頃、帽子を被って廊下に走り出した瞬間、廊下にいた久保という教師に帽子の縁をはねと

ばされたことがあった。私が悪いのかも知れないが、急なことだったので、ビックリしたと同時に、何とやることをとおもったことであった。その教師には、3年間関わったこともなかったし、近くへ行ったこともなかった。

音楽の先生が、医大病院に入院したので、仲良しの友だちと二人で自転車で医大まで行ったことがある。途中、尻は痛くなるし、行きはよいが、帰りは特に辛かった。藤崎のダムのところまで泳いでかえった。

2年生の夏頃、毎日のように紀ノ川に出かけた。「ヤス(モリ)」と水中めがねをもって、流れのあまりない所で、うなぎを取るためである。大きな石をのけると、うなぎがひょろりとでてくる。そのうなぎの後を追って、うなぎが止まったところをヤスで頭に近い所をつくのだ。半日シャツを着て、2匹も取れば大漁である。夕方、一人で蒲焼きをして食べるのである。近所にいい匂いが広がっていった。

また、日暮れ前、たこ糸20m位に1m間隔に1m足らずの糸をつけ、その先の針にはみみず、どじょう、こおろぎ、などのえさをつけて川上めがけて沈めておき、翌朝、日が昇る前に朝露の中を自転車を走らせて、昨日仕掛けた糸を引くのが楽しみであった。ぐぐっと手応えがし、なまずだの、こいだの、うぐいだのがかかっているのが楽しみであった。何の手応えのない日もあった。

昼間、紀ノ川に泳ぎに行き、ヒバリが飛び立った後を見ると、ひばりの卵が産まれていた。何日かして、その場所に行くと、雛がかえっていた。大きくなったひなを家に持ち帰り、餌を水でといてあげるとよくたべるが、糞づまりでほとんど死んでしまった。

また、かもめだったとおもうのだが、石を投げると、こっちに向かって突進してくる鳥もあった。

ある時、紀ノ川の川原で、ガラスの破片で足の裏を大きく切ったことがあった。近くに誰もいなかったので、血がどンドン出てくるので、頭を低くして横になり、足を高く上げて寝ていた。しばらくすると血は止まっていた。

蓄膿症は益々重くなり、鼻水がよくでるようになった。

初午で、紀伊長田の観音さんへ一人で行った時、見せ物を見るのが好きだったので、ハブに腕を噛ませ、この薬を塗るとたちまち治るというのを見ていた。ハブを見せるだけで、噛ませないで、出刃包丁を腕に押し当てて引くと赤い血の筋が見えた。それを見ていて、足下がぼんやりとかすんできた。貧血を起し始めたのだと自分でもわかったので、その場にしばらくしゃがんでいた。

このことがあってから、医者になるということは、無理だということが自覚できたように思う。

中学校3年生は、夏休みは、毎日のように補習の授

業があった。

相撲部は、11月頃まで、相撲の練習をした。吹きさらしの運動場の隅の土俵で、寒くて冷たいので、俵の上の上で自分の番がくるのを待っていた。それでも、教室で、まわしを巻いている時は、背中にじわっと汗がにじんできていたのだが。郡大会や県大会にもでたが、県大会(県和商)では、土俵にあがっても、雲の上を歩いているような気持ちであった。

昭和32年の秋、運動会の行進曲がそれ以前と変わった。軽快なりズムの曲であった。それは、「緑の山河」の曲だった。当時の校長先生も同じ組合員であり、私たちの学校の校長先生は、郡の執行委員か何かしていたようであった。

中学校生活の中で、私の性格を裏付けるような行動があった。生徒会の役員をしていたこともあったが、全校集会が終わると、みんな教室へ帰るように、「前へ進め」と言うようになっていた。他の人たちは、何の苦もなく、「教室へ向かって、前へ進め」と言っても、私は、1回もその号令をかけることができなかった。いつもその時になると、後ろへさがっていたら、言うのが好きな人がちゃんと言ってきてくれた。

この年、昭和33年4月から、それまで小学区制だった高校が、郡内どこへでも行けるというので、先生たちは、7、8人の生徒を高野口にある伊都高校へ行ってはどうかということであった。何も分からないまま、受験して、伊都高校へ3年間、汽車で通うことになった。

(4)高校時代

高校時代は楽しい3年間であった。青春そのものであったと、自分は思っている。音楽部とESSに入り、音楽部では、楠本先生という素晴らしい先生に合唱を教えてもらい、県の大会で「美しき青きドナウ」を歌ったことが忘れられない。また、部活の合間に、一寸でも時間があると、音楽室でフォークダンスをしてみんなで楽しんだ。本当は、私の声は高いのだが、男はバスだと思って出ない声を無理して出していたように思う。高校野球の県予選の時も、楠本先生は、替え歌で応援歌を作りみんなで応援したこともある。

ESSでは、あまり英語は得意ではないので、わからないけれど、英語劇を文化祭でした。「スノー ホワイト」(白雪姫)という題の劇であった。家来の一人で、学生服を前後ろ逆さに着て、金のテープを胸にはり、「イエス サー」と一言言ったきりであった。

運動会では、目立つのをあれほどいやがっていたにもかかわらず、赤い母親の着物を着て、袴をはき、たすき掛けの姿に学生帽を被った応援団長をしていた。教壇を運動場に運び、その上で、「三三七拍子」をするとは思いつかなかったが、すんなりと自分で受け入れていったと思う。また、学級の仲間が、みんな私を支えて練習にも熱がはいっていった。

高校2年生の修学旅行の時、私はどこで聞いたのかはわからなかったけれど、修学旅行では「酒」を飲むものだという雰囲気があった。だから、私自身は酒は飲めなかったけれど、集合前の駅前の売店で「ウィスキー」の小瓶を買っていた。魔がさしたとしかいいようのない行動であった。真面目な私が「ウィスキー」を買うという行為をどう説明すればいいのだろうか。

夜、お風呂に入り、少しチビリとウィスキーを飲み、顔が赤くなるのがわかったので、押入の中で布団にくるまっていた。しばらくそのままいたら、担任の阪井先生が見回りに来て、私が押し入れの中で布団をかぶっているのを見つけ、汗を流していたので、風呂へ入ってすぐだと勘違いされていたのを細く目を開けて、先生を見ていた。何もおとがめはなかった。

伊都高校は、体育では、水泳が必修であった。私は高い所が怖いので、泳ぐことはできても、飛び込み台からは飛び込めなかった。飛び込み台に上り、下を見ると、3mほどの深さ、そして、飛び込み台が5mあったのだろうか、上に立つと足が震えた。それは、台の上に立つと台までの高さに身長が加わるので、本当に怖かった。台の上に寝そべて下を見ていた。飛び込めないと体育の単位がないというので、私も1回だけ、足から飛び込んだ。脇をしめていたので、水に入る瞬間腕が水に当たって、水から出ると腕が白くなっていた。高校生になって、初めて「海水パンツ」というものをはいた。中学校時代は、6尺の白いさらしのふんどしであった。

学業はあまり芳しくなくても、毎日が充実していた。

3年生の夏休み前、恒例の水泳大会があった。7月の20日の少し前だった。早く下校し、汽車通仲間たちと、時間待ちのために(汽車は1時間に1本)、花見の名所である庚申山へ登るのが常であった。この時も何か魔がさしたのか(魔がさすことが多いが)タバコ屋ではっかの入った「みどり」という銘柄だったと思うが、たばこを一箱買って山へ持って行った。恐る恐る1本に火をつけて、吸い始めた。

はっかのよいにおいがしたが、別に何の感情もなかった。次の日も、友だちと庚申山へ登り、木陰でタバコを吸った。

そして、夏休み、今度は家で、タバコを吸い始めた。「みどり」から、「ピース」そして「スリーA」へと銘柄がかわっていき、2学期になった。学校では、全般的にタバコを取り締まろうとしているのが、よくわかった。全校集会では、生徒指導の先生が、朝、校庭を回ると、バケツに半分も吸い殻が集まるという話をしていた。私たちは、絶対に、学校の中では吸わないという約束をしていた。

10月12日だったと思う。当時、社会党の委員長の浅沼稲次郎さんが、日比谷公会堂で演説中に右翼の青年山口乙矢に刺されて死亡したことを知り、「浅沼さんが

殺されたし、自分らも、タバコを吸うのを止めよう」といって、それからは、たばこを吸うことはしなくなった。

それから2週間ほど経ったある日、担任の先生から、「明日、唾液検査をする。30年前にたった1回だけたばこをすった人でも、この検査をすれば、吸ったことがわかる。」ということであった。みんなは、検査の日、ラムネを口に含んだり、梅干しを口に入れて登校してきた。口の中の唾液の性質を変えようと必死であった。教卓の上には、名簿の順の番号が書いてあり、その番号の所につばをつけるのであった。私はひとさし指だと、ニコチンが付いているかと思い、小指でつばを番号の所につけた。少なめにしたら、先生は、「もっとたくさん。」といった。

男子だけの唾液検査であった。

3日ほどたって、先生は言った。「検査紙が古くて結果がちゃんとでなかった。」と。

私たち生徒は、「脅したな。」とだれもが思ったしそう言い合った。今でも、あのとき、ちゃんと、タバコの害について説明してくれていたなら、たばこは吸っていないだろうと思う。何かのきっかけで止めることができる青年なのだから。

その後、みんなは、せきを切ったように、タバコを吸い始めた。目の悪い日本史の先生の授業中も、タバコを吸う生徒もいた。私も、みんなのする正しくないことを一緒にしてしまう青年になっていった。

大学は金沢大学法文学部を受験したが失敗した。和歌山大学経済学部も失敗した。

(5)浪人時代

京都の近畿予備校に行き、下宿生活を始めた。初めのうちは希望をもって予備校の授業にも早朝から出だし、成績も張り出される程の点数を取ることでもできたが、段々と、怠け、送ってくれる生活費もパチンコに使うこともあった。

夏に帰省していた時、「第二室戸台風」が襲ってきた。父と風でいばった雨戸を押さえた。

その後、私の浪人の費用を作るために、田を蜜柑畑にしたものを手放さなければならなかったことを聞いた。それを聞いていながら、京都で浪人生活を続けることはできなかった。12月、京都が底冷えがする頃、田舎に帰ってきた。

5月の葵まつりは優雅であった。7月の祇園まつりの宵山の賑わいはすごいものであった。市電の電線を全部外して鉦をとすという。先頭に行くのは長刀鉦である理由も知った。大文字の送り火は、下宿のベランダの柵にはしごを渡して、はしご段の一つ一つに座布団を敷き、それに寝そべて見ていた。妙法が近くにあって、煙が近くまで来ていた。10月は時代祭であった。京都に都があったのを記念して平安神宮を造ったという。官軍の行進から、平安時代までの時代

絵巻であった。他に、下鴨神社の祭りや、比叡山に下宿の仲間と歩いて登ったり、今は立派な国際会館ができていているけれど、洛北高校の北、ノートルダム女子大学の所から山へ入ると、小さな池があった。それが、宝ヶ池である。勉強につかされると、30分もあればいくことができた。静かな池であった。

田舎に帰ってきて、再度、金沢大学を受験したが失敗した。先生にでもなろうかと思い、和歌山大学学芸学部に入學した。

3. 第Ⅱ期 生活綴り方研究会と充実した学生生活 ——社会的にも大きく目を開かせてもらったことと、 県内の多くの実践家とめぐりあったこと——

大学に入學して、真っ先に「和歌山大学学生教育科学研究会」に入部した。当時の「教科研」には4つの研究班があった。一つは「地域」、芦原という同和地区の子どもと一緒に遊んだり勉強したりするグループである。二つは「戦後教育史」の班。日本の戦後の教育の歴史を学ぶグループである。三つは、「僻地教育」班であった。当時、有田郡や日高郡の僻地調査をしたり、学校訪問をしたりするグループである。最後の四つの班は「生活綴り方」グループであった。はじめて手にした本は、国分一太郎著「生活綴り方読本」だったと思う。

5月の連休に、毎年近畿の教育系大学の生活綴り方研究会が、一カ所に集まって交流する機会(近プロ合宿)があった。その時は、京都教育大学が主催して、南禅寺会館で、現場の先生の教育実践を聞いたり、各大学が研究していることをレポートしたり交流会したりと、楽しい1泊2日であった。「生活綴り方」という言葉にもなじみがなかったが、夜、現場の話の中で、その先生のお嬢さんが幼稚園に行っていて、「立春」というのをこんなに見せてくれたという。娘さんは、向こうを向いて、「冬さん、さよなら。」そして、こちらを向くと、ぺこりとおじぎをして「春さんこんにちは。」と言ったという。なんと、立春を具体的に理解しているのではないかと思い、それ以来、「生活綴り方」にのめり込んでいくようになっていった。そして、私が2年生になった時、教科研から、生活綴り方班が独立して、「和歌山大学生生活綴り方研究会(のいちごの会)」のサークルが誕生し、初代の部長となった。

生活綴り方に私を引きつけたもう一つは、京都の1年生の女の子の「まる」という詩であった。

「まるを してもらいました。／ ななつ してもらいました。／ かばんに いれんと もってかえりました。／ よい おてんきでした。」うれしいという言葉がひとつも書かれていないのに、この子の喜びがあふれている詩であると思った。これが生活綴り方だと、自分でそう思った。

1年生の夏までに、教科研についての様々な噂があ

った。教科研は赤いサークルだから止めたいという新入部員も多かった。私は、機関誌「はぐくみ」にそのような内容を書いた。教科研が赤いといって、サークルをやめていくのをどう考えればいいのかと。

夏休みに、小倉中学校で合宿をした。顧問の西慈勝先生は、私が入学した直後は、京都大学病院に入院していたので、お会いするのは、初めてであった。「はぐくみ」の合評会が始まり、一人ひとりの課題が書かれた機関誌を読みながら、先生は助言をしてくれた。私の番になり、前述の「教科研というサークルが赤いといってやめていくのをどう考えたらいいのか」ということに対して、西先生はあらかじめ次のような話をしてくれた。一人の教師が、子どもの立場に立ち、そして、その保護者とむすびつき、真に、その親子の教育に心を傾ける教育をしていて、そして、その教師に「赤い先生」といわれるのなら、私は敢えて「赤い先生になりたい」と。私にとっては、コペルニクスの転換であった。「赤」ということを全面肯定された助言であった。そうかといっても、思想的には、なかなか踏み込めないものであった。

2年生になり、近畿ブロックの生活綴り方合宿は、和歌山が担当することになっていた。加太の少年自然の家での1泊2日であった。その時、現場の先生として、佐々木賢太郎先生に来てもらい、「体育の子」の実践を語ってもらった。また、先生は、自然の家の床の間に掛けられている「南方熊楠」の話も詳しく語ってくれた。後に、自然環境問題や、天神崎を守る運動(ナショナルトラスト運動)にはいられる幅の広い、佐々木先生を見た思いがした。

それ以来、綴り方のサークルで、佐々木賢太郎先生から、何度も実践の話聞き、体育の先生が作文を書かしているというユニークさを全教師が学ばなくてはならないと思ったものだった。

綴り方研究会としてサークルが独立し、夏の合宿を田辺湾に浮かぶ元島で行った。この時は3泊くらいしたのではないと思う。田辺在住の「紀南作文教育研究会」(紀南作教)を創った藤田五与先生に来てもらい、先生が綴り方教育へ目覚めるきっかけや、都会(東京)の研究集会で、綴り方の実践を報告したら、「それは、這い回る経験主義だ。」と言われたとき、「そんなら、お前ら、這い回ったことあるんか。」と言り返したというようはなしをきいた。

同じ合宿で、大阪の忠岡在住の、桜井和郎さんにも来てもらった。桜井さんは、教師ではなくて、古本屋のご主人である。先輩の田浦さんという人が、南海電車の中で「作文と教育」を読んでいたら、声を掛けてきてくれたのがきっかけで、個人的にも、サークルとも交流していた。桜井さんは、忠岡の町で、「わになって」という子育てのサークルをつくり、地域で子育てをしていた。私たち学生もそれに参加し、子どもたち

とふれあったりしていた。年に何回か、講演会を開いていて、松川利幸先生や野名竜二先生とも面識をもつようになっていった。桜井さんは、横浜の生麦小学校の小沢勲先生のファンで、小沢先生の「えんとつ」という学級だよりをいつも見ていた。

この合宿以来も、大病を患っていたにもかかわらず、私の結婚式にも来てくれ、7年ほどの間だったけれど、お付き合いをさせていただいた。私の結婚式のすぐあとに、ご逝去されたという連絡をいただいた。

近畿教育系学生ゼミナールには、欠かさず参加し、「北方教育」の歴史を発表したり、他大学のレポート討論に参加したり、また、まだ深く理解できていなかった集団主義教育の司会をさせられたりと、アップアップの状態の時もあった。

サークルの顧問の先生に大井令雄先生になってもらい、丁度、私が入学した年1962年、日本作文の会が、次のような流れのなかで生活綴り方教育に対する方針転換をした。50年代後半から60年代にかけて、民間教育研究団体は大きな高まりをみせ、その中で、教科指導の研究の立ち後れを指摘すると共に、生活綴り方運動に対しては、「生活綴り方万能論」を批判し、生活綴り方固有の領域を明らかにしていくことが求められた。これに対して、日本作文の会は、1962年度、活動方針は、民間教育団体は等しく何のために、誰のために教育はあるのか、何をどう教えるのか、その条件をどのように獲得していくのか、ということに結集していかなくてはならないとして、「われわれには、全体の教育や国語教育との関連を忘れぬなかで、今日の日本の作文教育を正しく発展させ、父母たちと子どもたちに十分に奉仕するという専門団体としての大きな任務がある」と述べ、「専門団体としての重大な任務を今日においてこそ、いっそう力をこめて果たしていかなければならない」とされているが、それは、「かつて、わが会に教育のすべてにわたってかかりすぎていたその重荷を、各種専門研究団体が正当に分け合って受け持ちつつ、共同の成果をあげていくべき日がついに到来したからである。」として、「日本作文の会の今後の研究活動は、次の8点」で述べられている。それは、「①教育全体との関連を失わない形で国語科教育全般に力を注ぐ。②子どもの表現活動、創造活動の分野を指導する側面として文章表現指導の独自性を重視し、それを教育・国語科教育に大きく位置づけるための教育に力を注ぐ。③生活綴り方の遺産を正しく継承し、これを今日において発展させる道をハッキリさせる。④題材論の研究に強い意欲を燃やす。⑤表現活動体系の充実をはかる。⑥児童詩教育論の確立をはかり、その指導と作品の向上をめざす。⑦生活綴り方・作文教育でいう、いわゆる生活指導という概念を整理していくようにつとめる。⑧新しいタイプの実践記録の創造をめざす。」ということである。ただひとつ、私

たちは、当時の先輩の先生が綴り方を生活指導と結びつけて実践してきたことを考えると、それは「重荷」でもなんでもなくて生活綴り方教育にかかっていた本質的なものではないか。生活綴り方の歴史をみても、本質的ではないか、それを整理するということが、「生活綴り方の遺産を正しく継承する」ということにも反するのではないかとみんなで論議を重ねてきていた。

私たちが部会で学習し、そのもっと深いところを理解するために学習会をもった。大阪綴り方の会の松川利幸先生に来てもらい、大井先生の「中等教育原理」の時間をいただき、それを受講している学生さんたちも含めて、(はじめの挨拶でこういうことになったことを説明)講演して頂いた。当時は、松川先生自身も、日本作文の会の転換ぶりをそこまでとは思ってはいなかった。(と後々語ってくれた。)

方針転換後、「作文と教育」誌上で、大阪の野名竜二先生と東京の田宮輝夫先生のいわゆる「野名・田宮論争」が始まった。

和歌山県の綴り方の先生たちは、綴り方を書かせていても、日本作文の会への結集がなかったのは、そのことも関係しているのではないかと思う。それは、同和教育が作文教育を学び、第4回全同教大会が同和教育と作文教育が結合したと小川太郎さんが言われるように、逆に、作文教育が同和教育から学ばなくてはならないのではないか。

2年生の時の全国教育系学生ゼミナールは、山口大学であった。夜行列車が、朝小郡の駅に着き、そこで乗り換え、山口にいくまでの間、北海道学大の女子に、「出稼ぎの歌」を覚えてもらい、それ以後、ずっと覚えている。当時の私の「おはこ」でもあった。

全体会の講演は、矢川徳光先生であった。夜行列車の疲れが出て、講演の内容は殆ど覚えていない。

近畿の生活綴り方の仲間は、京都の倉本さんが一番光っていた。口も達者で、批判も鋭かった。

近教ゼミの生活綴り方分科会で、神戸大学の学生の、「生活綴り方教育は、反封建には役にたつが、反独占には役に立たない」という意見に反論できなかったことが、今もその時の気分を思い起こさせられる。

3年生になったとき、神戸大学が当番で、摩耶山で合宿をした。丁度、私の隣に小川太郎先生が座られ、どこかの大学の発表した、北方教育に留岡清男が生活綴り方批判をするところ、「綴り方は畢竟、観賞に始まって感傷におわる」という、私も知っていることを小川太郎さんが話してくれたことが、何よりも嬉しく思った。

生活綴り方研究会では、機関誌「のいちご」を出していた。年間3回ほど発行していた。また、生活ノートというのを一人一冊ずつつくり、誰のノートにも書き込んでよいという約束で、みんなのノートに書き込んでいた。

「やまびこ学校」「かえるの学級」「たんばの子」「御坊小学校5年生、学年新聞大地」などの多くの教育実践記録を分析したり、歴史を深く学んだりしながら、県内の現場の先生を招いて実践の話聞く機会を多く取り入れた。佐々木賢太郎先生をはじめ、岡本佳雄先生(この時分は、勤評闘争であおりそそのかしの罪で専従中)、吉川薫雄先生、田伏通男先生など本当に多くの先輩教師の実践を聞かせてもらった。

近畿教育系学生ゼミナールの生活綴り方教育分科会では、小川太郎先生や杉山明男先生から綴り方の話を聞くとともに、教師になってからも「同和教育における授業と教材研究会」でも、また杉山先生や小川先生からも多くを学ばせてもらうことになった。

大学のゼミナール活動では、ケネディ暗殺の時のニュースも京都の宿で聞いた。静岡では、戸塚廉先生が助言者として来られ、戦前の文集作りの話やヤスリで原紙を鉄筆で切ることなどを教えてもらった。

年代ははっきり覚えていないが、山田昇先生がこの頃、和歌山大学に赴任してきていた。

和歌山大学でも1964年に近畿教育系学生ゼミナールが開かれた。当時は事務局の仕事も少し手伝っていた。

大学祭の展示のために、「大地」の実践分析をした。そして、御坊小学校での研究会に合わせて、部員は、当時の先生3名に「大地」を作る時の裏話を聞くことができた。

私の大学生生活はサークル活動が主な活動場所であった。仲間づくりの大切さや、誰かのために悩むということも、サークルの中で学んだ。生活綴り方実践を学生生活綴り方サークルがそのまま実践していたといっても良かった。綴り方は「書くことを大切にすること」といって、生活ノートを実践したり、サークル内では、「自己主張」をすることが大事にされた。そして仲間を大事にすることも、綴り方のサークルの中で学んだことであった。

読書から学んだことは、柳田兼十郎さんの「労働者の人間変革」という本に心を奪われた。それには、昔、人間は自然と闘い自然を変えることを実践した。治山治水など、自然災害を防ぐことを先ず第一に考えたことであった。それは、人間が生きていくためには立ち向かわなければならなかったからである。その後、歴史はすすみ、人間は、社会を変える戦いを起こした。人間の生きているこの社会を自分たちの住みよい社会にするために、人間は闘った。その後、今日になって、人間は自分自身と向き合い、自分自身を変革していくことに目覚めた。こういう考えは、それまでの自分の中にはなかったものであったので、随分と新鮮な受け止め方をした。

山田昇先生が赴任して来られて、大井先生と一緒に「生活綴り方研究会」の顧問をお願いすると快く引き受けてくれた。そして、冬の大池荘での合宿で、山田

先生に来てもらい、北方教育の理論的なことについて学習をした。先生は、一言でいって、「北方教育とは、科学と人権の教育であった」と話してくれたのを印象深く聞いた覚えがある。

大学4年生になり、紀南作教の合宿研究会に近露の近野中学校に向かった。佐々木先生や藤田先生、植田京一先生たち一流の紀南作教の先生たちの実践を聞いていた。一つ忘れられないことがある。この頃では班ノートとかなんとか言って、あたかもあたらしいものかのように言っているが、紀南作教では、ずっと昔から「筋ノート」と言って実践してきたと。

同じ頃、先輩の教師が栗栖川の山の中の学校へ赴任しているので、学生5人ほどで学校訪問をした。その学校は、その後すぐに廃校となってしまった。

後期の授業が始まり、山田昇先生の「教育史特講」という授業を受けた。学生は私ひとり、寒い教室で、北方教育の講義をされる先生の話聞きながら、心を暖かくふるわせながら聞いたことを今も忘れることができない。鈴木三重吉が、汽車の窓から北方の子どもたちが書いた作文を、「こんなものは作文じゃない」と文集をプラットフォームへ投げた話は今も心に残っている。

大学4年生も終わり、故郷の教育科学研究会の追出しコンパに参加した。その席上、西滋勝先生は、餞の言葉として次のような話をしてくれた。

「教師になって、この頃の子どもは……とか、今日びの子どもは……というように、子どもの可能性が見えなくなったとき、教壇を去りなさい。」これが私に課せられた十字架のような気持ちで教師生活を過ごしてきたといっても過言ではない。時として、子どもを大切に、丁寧に見ることが出来ない時があった時、これは、世をしのふ仮の姿だとして、早く元の見方に戻らなくてはと、気をとりなおしたものだ。

卒業できると思っていたが、「微分積分学B」の単位、2単位が取得できなかった。普通、1教科の時は追試をしてくれるのが常であったと聞いていたが、どういうわけか、それもかなわなかった。

卒業論文は、「リアリズム綴り方教育論」としたが、「北方性教育運動におけるリアリズムの問題」というテーマで機関紙「のいちご」に書いた文章がある。

生活綴り方教育が、北方性教育運動として、運動体として発展してきたのは、「生活台」に立脚した教育実践を営んできたからに他ならない。「生活台への正しい姿勢は、観照的に、傍観的に子どもの生活事実を観察し記述するのではない。我等は、濁流に押し流されてゆく赤裸な子どもの前に立って、今こそ何ら為すところなきリベラリズムを揚棄し、野性的な彼らの意欲に立脚し、積極的に目的的に生活統制を速やかになしとげねばならぬ。」(『教育・北日本』宣言)「父も母もひとしくうずもれているむしろ運命的な、この冷たい土

のきずなの正しくあるために、私たちは徒な昂奮や時事論や溺愛のペールをはぎとらねばならない」(『北方性とその指導理論』)と、父母、自分(教師)、子どもがともに生活しているこの生活台に立脚した教育こそ、生活綴り方教育の土台であった。

生活綴り方教師たちは、子どもたちを「生活者」としてとらえていたし、子どもたちを社会の反映として存在していることを指摘した。村山俊太郎氏は、荒木ひで氏へ(後村山氏の妻)に送った便りの中に次のように書いている。「子どもこそ本当のものを放射しているのだ。ただ放射するものを感じてくれる者と無感覚なものがあるばかり、子どもから本当のものをきけないのは教師の罪だ。」(『北方の灯とともに』)「子どもは作文を書き、詩に書き、歌に書いて私の涙を——否、階級的な目覚めを語っていった。」(同前)

生活つづりかたは、「表現を通して」と言う主張の中に、今まで述べてきた「生活」との関連においてとらえなければならないのは、佐々木昂氏の言う「綴り方の問題は生活と表現とだ。」(『感覚形態』)に端的に示されている。あるいはまた、「綴り方の正しい教育の出発は、表現と生活の間にうそのないほんとうの語りの中から生まれる」(『生活綴り方の現実の問題』加藤周四郎)、「われわれは、綴り方教育の関する限りにおいて、生活と表現と分離して考えることはできない」(沢田一彦)とあるように、「生活と表現との関係」についてリアリズム論を展開している。

さて、相前後するが、昭和初年頃の教育は、「現実から遊離」し「概念的な人格形成へ」のしごとにしがみついていた村山ひで氏は、「教授細目に示されているライスカレー、オムレツ、すまし汁等の実習をして、つかれた身体でふと、子どもたちの弁当のおかずのことに考えをとめずにはおれない。ひえばかりの主食。うめぼしだけの副食。ほとんどがそうした弁当しか持って来られないこの子どもたちに、オムレツの作り方を教え、すまし汁のだしのと리카たを教える、このわたしのやっている教育！いったい教育とはなんだろう。」と疑問を持ち始めた。そして、学校教育は「個性尊重と称しても、6年乃至8年間の期限付きだ」(『感覚形態』佐々木昂)「権力が保障を与える公正な虚偽の存在だ。」(同前)と、公教育を批判することにより、外からの概念のおしつけではなく、生きた生活の現実に立って「いかに生き、いかに生きさせるか」(『生活童詩の理論と実践』村山俊太郎)を強調しつつ、素朴に、「真の教育とは何なのか」と問いかけることにより、「教育におけるリアリズム」の道を追求していった。この教育におけるリアリズムの道を追求し始めたのは、「昭和7年の秋の会合からであった。あの時はすでにリアリズムという片仮名の名称ではっきり話し合った」(『リアリズム綴り方教育論』佐々木昂)のであった。そして、東北一帯が冷害によって、なお一層、教育と実生

活との矛盾を自覚し始めたのであった。そして、教育と実生活との矛盾を認識することによって、教化主義的な公教育に対し、子どもたちの生活に根ざした教育実践を行っていったのである。特に、生活綴り方教師たちが、「方法上の観念的な概論や空論をすてて、具象的な現実の中に正路を開拓することを使命とする」という『北方教育』の巻頭言にある如く、あるいはまた、「我等がこの生活台に正しく姿勢することによってのみ、教育が教育として輝かしい指導性を把握する所以を確信し」「濁流に押し流されてゆく赤裸な子どもの前に立って」(『教育・北日本』宣言)「何とかしなければ、何とかしなければ」(田村修二)とあえぐのであった。従って、「リアリズムが単なる空疎な概念の構築ではなく、生活の中に流れるものであれば、積極的に組織されたリアリズムは更に生活を昂揚し、前進せしむるところの拍車となるであろう」(『実践の方向性』成田忠久)と意識を高めていった。

だからこそ、知性を欠いた生活意欲に、科学的な知性を加えた「生活的知性」を獲得させることが北方の教育段階として一番大切なものとされた。教師は、学習意欲の根底に生活意欲を置き、それが生活と結びついた知識を高めようとしたのであった。そして、教師は、「北方の子どもは北方の子どもらしく育てなければならない」と考え「北方の文化を開拓する一歩前進への散兵だ」とし、この「散兵を指揮し」「散兵の協働性」を要請したのであった。(『北方性とその指導理論』)従って、子どもたちには、はっきりと、この生活の事実を分からせる。「暗さにおしこめるのではなく、暗さを克服させるために、暗いじめじめした恵まれない生活台をはっきりわからせよう」とし、「個人的な英雄主義、立身出世主義を精算させて、正しき散兵意識を強調」(同前)し、教師たちは、「現実を直視することによって、現実からのみ導かれる肉体の指向性の正しい協働の鞭で鍛え、組織し再編成しよう」(同前)としたのであった。

「封建遺制の根強く残っている東北農村で発足した北方の生活綴り方教育運動は、綴り方を記号的技術として導く以前に生活方法としての綴り方構築作業に邁進すべきだ」(村山俊太郎)や「綴り方ということも、単に生活をありのままに観察し記述するという受動的観照的態度から新しい生き方、新しい人間関係を創造するために役立つ最も積極的な生活勉強の仕方である。」(村山)という主張の中でも明らかなように、「生活を生活で教える教育」(鈴木道太)として態度してきたのであった。

5年生になって、和歌山市に引っ越しをして、下宿することになった。そして、この1年間で小学校2級の免許をとることにした。従って、4年生の時に附属中学校の数学科の実習をしていた(3週間・3単位)が、5年生でも再度(4週間・4単位)の実習をこなした。

附属小学校へは後期の教育実習であった。5年生の子どもたちの性格や特技や特徴をメモしたり関わっていくなかでわかったことをノートに記録していった。実習期間中のある時、前期の教育実習生が、私たちの学級へ遊びに来た。後期の私たちは、子どもを掴むのに苦労していたとき、前期の実習生が子どもたちをさらっていった。「Kセンセー」と子どもたちは昼休みにはその元実習生についていくようになった。何と無神経な実習生かと思い、それ以後、彼とは一線を画するようになった。しかし、現実には、厳しいものがあつた。松江小学校で同僚として再会し、雄湊小学校では管理職として私は向かい合った。(このことについては後述)

途中、学部名称変更があり、自治会を中心に「師範学校への移行反対」で全学がまとまり、学部長交渉などをくりかえしたが、結果的には、教育学部として押し切られてしまった。サークルで生活綴り方を学び、実践記録を読み、他大学の綴り方の仲間と交流し、そして、教師にこそなろうとして、大学を卒業していった。

大学4年生から、「和歌山県民間教育サークル」の研究集会に参加したり、第18回全国同和教育研究大会和歌山大会に参加もした。そのとき、雑賀小学校の分科会で、双子の女の子(中学生)が、地域の取り組みを発表しているのを聞いていた。(後に姉の方が教師となり、同授研のなかで同じ志を持つ教師仲間として接してきている。)

4. 第Ⅲ期 野崎小学校時代

——教師として出発し、目の前の課題に右往左往し、「てのひら作文の会」をつくり、若い先生たちと悩みを共有しつつ、教育実践と組合活動とを両立させていこうと、歩み始めた。——

1967年4月。和歌山市立野崎小学校に赴任した。戦後22年で、素朴な地域であった。

教師になった4月11日に、学級通信第1号を発行している。その挨拶には、

「このたび、和歌山大学を卒業して、この野崎小学校に赴任してきました森 教二です。そして、何かのご縁があったのでしょうか。5日に学校に来ると、担任が4年1組に決まっていました。

この1年間、4年1組の担任となり、お父さん、お母さんの大切な子どもさんを朝から晩までおあずかりすることになりました。何分、シンマイの一年生教師ですので、何かと行き届かないところもたくさん出てきて、いろんな文句も多いことだろうと思います。子どもたちのこと、担任への不満、教育のこと、ああしてほしい、こうしてほしいというお父さんお母さんのご希望や願いなどを聞かせてほしいと思います。口のところまで出かかっているのに、面と向かって言うの

は言いにくい時は、包装紙の裏にでも書いて、子どもに持たせて来てください。とかく、教師というものには、何かととっつきにくい点もあり、引っ込み思案をしているお父さんやお母さんも多いことだろうと思います。(中略)

10日に、名簿を見て、名前を呼びました。名前は地名と同じで大変難しく感じました。(中略)何もかも新しいことでいっぱいです。

この1年間、子どもたちを通して、お父さん、お母さん方の望んでおられることを聞かせてもらい、少しでも良い「せんせい」になりたいとおもっています。そんな訳で、学級と家庭をいつも結びつけておくために、私はこの「学級通信」というものを発行し、子どもしたこと、学級のこと、行事その他、いろんなことを伝えたいと思っています。1週間に1回か、10日に1回ほど発行したいと思っています。「通信」へのご意見やご希望があれば、大歓迎です。新しい気持ちで、子どもたちの教育に精一杯打ち込みたいと思っています。どうかよろしくお願い致します。 もり きょうじ」と書いた。

4月17日の第2号には、
「(前略)教師になって5日目、毎日大きな声でしゃべっているの、声がかすれてゼリゼリします。4年1組は、いろんな子どもたちがいます。がさがさしてすばしこい子、勉強中なのに立って歩く子ども、がやがやとやかましくしゃべりたてる子ども、また、反対に、休み中でもじっと座っている子ども。そんな様々な生きている子どもたちがこの1組のみんなです。どの子どももみんな元気です。」と学級のほんの少しの子どもの様子が書かれている。

4月24日の第3号には、
「(前略)この40人の子どもからだからにじみ出るエネルギーを先生はもてあましています。月曜日、新1年生との対面式がありました。その時、全校生徒が運動場に集まっているのに、4年1組の男子数人だけが、教室で牛乳のフタで遊んでいた。チャイムがなくても教室に入って来ない。遊び時間と勉強時間のけじめがついていない。(中略)ぐるっと四角に座って、瀬戸くんと山本さんのお誕生会を開きました。その時のやかましかったこと!(後略)」と、あからさまに学級のうまくいっていない様子が表現されている。

4月30日発行の第4号に、子どもたちの作文がのせてある。「4年生になって」という題である。

「いよいよ先生が教室にはいつてきた。ぼくは、どんな先生かなあと思った。そしたら、わかい先生だった。それからいっしょにべんきょうして、1週間ぐらいたった。みんなガヤガヤいいだした。それでもおこらない先生なので、みんなはよけいガヤガヤいいだした。先生が話しているのもきかないようになってきた。先

生は、ちょっとだけおこりだした。ぼくは、森先生はいい先生だと思いました。先生はいつものどがいたいといっています。みんながうるさくいうからだだと思います。もっともっとしずかな4年生になって、りっばな4年生になりたいと思います。4年1組は、3年1組のときから、ばかにされている。だから、もっとべんきょうして、りっばな4年1組にしようとおもいます。そのために、いっしょうけんめいべんきょうしよう。」この子はまじめな男の子である。

子どもたちの作文のあちらこちらに出てくることばには、「ほかの先生にわらわれないように」とか、「この組いつもおそい」とか、「しずかな時はさんかん日のときだけ」など、子どもたち自身もそう感じているのだが……。

5月15日の第10号には、1ヶ月間の感想のようなことが書かれている。

「(前略)1ヶ月前、新しく担任が決まって、4年1組の教室へ行きました。自己紹介をして、『おこらない』と子どもたちに言いました。最初の1週間、2週間は、声が出なくなって苦しみました。途中で勉強ができなくなった時もありました。そんなガヤガヤ学級をどうしたらうまく学級を運営したらいいか考えました。やはり、4年生ともなれば、遊び時間と勉強時間のケジメがつけられる年齢だと思ったから、子どもたちの中から自主的に自分たちの勉強を保障していこうという気持ちの起こってくるのを待ちました。そして、今もなお、自主性をまっています。」

そして、6月1日の第13号には、「4年1組のなかまの皆さんへの手紙」と題した学級通信が発行している。「(前略)4月10日から、50日が過ぎてしまいました。この50日間、楽しみにしながら学校にやってきました。先生という仕事をしている者は、毎日 毎日が楽しみの連続です。それは、なぜでしょう。私の答えはかんたんです。あなたたちは、生きている人間の子どもだからです。

それでは、なぜ、人間の子どもだから、先生は毎日楽しみにして学校に来るのでしょうか。人間の子どもは、自分の頭で考えることができるし、考えたことを実行できる勇気をもっているからです。

先生は、勇気をもっている人間の子どもに、なにを期待しているのでしょうか。人間の子どもは、むずかしいりくつはわからなくても、何が正しくて、何がまちがっているかということが、理解できるのです。それでは、4年1組の生きている人間の子どもたち、あなたたちは、何をしなくてはならないのでしょうか。それは、一口に言えば、『よく勉強する』ということです。『よく勉強する』というのは、算数や国語だけをさしているわけではありません。毎日毎日の学校生活の中で、発表する時、友だちと話をする時、遊んでいる時、友だちの話を聞く時……そんな色々な場面で、一定の

きまりを守るしゅうかんを身につけなければならないということです。もちろん、社会や国語などの教科も、4年生としてはずかしくないしきを身につけなければならないことは、いうまでもありません。

そして、1人だけが10歩進むよりも42人が1歩ずつ進んでいく4年1組になってほしいと思うのです。友だちの問題を自分の問題として考える4年1組になってほしいと思います。そうしてはじめて、ひとりのよろこびがみんなのよろこびとなり、ひとりのかなしみもみんなの悲しみになる学級になると思います。

4年1組のなかまのみなさん！先生は、授業もあまり上手ではありません。けれども、一生けんめいです。どうしたらよくわかるのだろう、どう教えたらいいのだろうと、いつも考えています。だから、みんなも、おもしろくなかったら、おもしろくないと言ってほしいし、先生が一生けんめいだったら、それに負けないくらいにがんばってほしいと思います。生きている人間の子どもは、1日1日がものすごいスピードで発達しています。

みなさん！みなさんの生きている時代は、夢が現実になる時代です。4年1組が、もっと生活しやすいように、43人が力を合わせてつくりかえていかなくてはならないと思います。先生も、もっと勉強します。

森 教 二

随分と観念的な文章だと思う。直接的な訴えだが、果たして当の子どもたちに通じたのだろうか。

4年生を担任し、学生時代の甘い、牧歌的な先生と子どもの姿を思い描いて教師になった。教師になった時、いくつかの目標を持っていた。子どもの味方になる教師になりたいとか、子どもと体温の違う教師にはなりたくないとか、学級通信や文集を発行したいなどなどである。

1日2日とすぎていくにつれて、学級の中の雰囲気はわかってきた。朝、学級通信を前の子に後ろの子へと渡していってもらっていると、もう端っこの筋の子たちはみんなプリントを手にしてしているのに、初めの頃に配ったプリントがまだ3番目くらいの所に止まっていた。見ると、さっさと渡すのではなく、プリントの端を雑巾の端をつまむような仕草で一枚ずつ後ろへ配っていくのである。どうしたのかと訪ねると、その前のMちゃんが2年生の時におしっこをちびったというのである。その後もMちゃんに対する差別(当時は差別といい、イジメという考え方はなかった)をなくす取り組みをかさねたが、概念的な説教になったり、みんなおしっこをしないのかというような言い方になったりのお話ばかりしていたように思う。当時、『作文と教育』に住井すゑさんが、短編の差別に関わる物語を書いていたので、子どもたちにはそれを読み聞かせていた。

問題は、学級が人の意見をきくことができなかったり、授業中に後ろの棚の上を両端から走ってきて、出

会った所でジャンケンをして、まけるとそこから飛び降りて、次々と続けていくのである。また、教授用そろばん(そろばんは4年生で教えることになっていた)の上に腹這いになり、横の腰板を蹴って遊ぶ子もあった。棚の上の子を注意していると、そろばんで遊ぶ子が出てくるし、いちごごこの毎日であった。学級通信に「4年1組のみなさんへ」という手紙を書いて、一生懸命勉強を教えている先生の気持ちをわかってほしいということを訴えた。子どもを掴むというスタートラインにもまだ立っていなかったことを、今になって思う。保護者は、1階の窓の外へ、子どもたちの様子を見に、聞き耳を立てに来ているのもわかったし、校長先生も、時には午前中後ろに立って授業を見にきていた。

6月頃、給食調理員さんの異動があり、紀の国荘で送別会をした。私は酒が飲めないので、ご飯が欲しくて注文をして、私だけがご飯を食べていた。すると、校長が、「今頃から、飯を食う者があるか。」と大声で叱られた。

掃除もなかなかきれいにできないので、教室は汚れていた。新採研で出かけたあと、自習している所へ隣の学級の先生が見に来てくれた時、「あんたらの教室は、うさぎ小屋みたいや」といったそうで、さすが、子どももカチンと来たのか、私にこんなことを言われたと憤慨していた。

子どもと仲良くならなければと思い、河西橋のたもとに河川敷きがあり、砂がたくさん置いてあり、広場もあるので、週に1回くらいそこに行って、相撲を取ったりおにごっこをしたりして、昼の給食の時間までにちゃんと教室までかえってくることを続けた。これは、校長に伝えなければならない事だったかもしれないけれど、1学期、2学期と続けていたが何も言われることはなかった。

そうはしても、なかなか真面目に授業に取り組むというところまでいかないまま、1学期は終わってしまった。

この年と次年度の2年間、ブロック同和(中学校ブロック)の研究が順番にまわってきていた。従って、校内では、教室に起こっている差別の実態を全職員で出し合い、話し合いを続けていた。6年生の学級のKちゃんが差別され、理科の時間にかえるの解剖するかわりにKちゃんを解剖しようという話になり、担任の先生の取り組みがはじまっていた。

2学期になり、明和中学校での県教研に参加し、国語分科会で、子どもたちが書いた詩を中心にレポートを出した。分科会では、新任教師の発表を優しいまなざしで聞いてくれていたように感じた。まだ概念的な詩が多いレポートであったと思う。

公務員共闘第9次賃金闘争で2時間ストライキを打つということを職場会で話し合っていた。みんなが行

ったら行くという意見のおかしさを感じていた。ひとり二人は、どんなことがあっても行かないという人がいるかぎり、みんなが行ったら行くということはあり得ないことである。私は、「みんなでストに参加し、処分されたらみんな同じではないですか。」というようなことを言ったら、分会長が「そういうことを、先輩に向かって言う言葉か。」と頭ごなしに叱られた。何回も職場会の回数を重ねたが、段々と参加人数が減っていくばかりであった。最終、6/35で、2時間ストライキに6名が整然と参加した。10月26日、経済センターに集まった組合員は、始業時刻近くになると、パラパラと帰り始め、今から思うと1時間ほどで解散したように思う。私たち野崎の分会の組合員は2時間のストライキだから、組合事務所で暫く時間をつぶし、2時間きっちりに校門をくぐった。

子どもとの関わりはそれほどの改善もないまま、依然として校長は時々後ろに立ちにくることも続いていた。

11月、岡山市で、「全国同和教育研究大会」があり、そこへ参加した。分科会では、4月からの子どもの差別の実態と、6年生のKちゃんの話を発表した。今までの私と異なる私のものであった。

その大会の報告集『同和教育 臨時増刊号 現実ととりくむ同和教育 第19回研究大会報告集』の教育内容分科会(46ページ)に次のように記録されている。

「小学校では、6年生の理科の時間に身体のみならずを学習する過程で、カエルの解剖を相談している教室のなかで、カエルよりも人間を解剖しよう。Kちゃんはどうぞ生きとつても役にたつたのやから、Kちゃんを解剖しようという発言を、平気でしかも冗談ではなしにする子どもが育ちつつあるという報告(Kちゃんという子は、父母に死別して、おじにひきとられ、育てられたIQ55という子である)も出された。(和歌山市)」

夜、心安くしていただいている中学校の水落先生に半年間の話をお茶店で聞いてもらった。長い長い話を聞いてもらった。「子どもたちは、私がこんなにいっしょうけんめい頑張つて子どものことをしているのに、少しもわかつてくれない」ということが主旨であった。水落先生は、次のような話をしてくれた。「森君、子どもって、分かってくれへんもんなんやぞ。大人だつて、この間のストに何人参加したんや。大人だつてわかつてくれへんのに、子どもはもっとわかつてくれへんもんなんやぞ。そやけど、子どもは、いつかきつと分かってくれる時がある。その、子どもって分かってくれへんもんやということと、いつかきつとわかつてくれるんやということとを両方、頭の中に入れておかないといけない。」そのように言ってくれたように思う。

水落先生の言葉は、私の教師人生のバックボーンとなっていったように思う。

そうはいっても、学級の子どもの様子にはなかなか変化がない。新任研修で出会った同期の小学校勤務の仲間と出会うと、子どもの悩み、学校の不満などどうしていいかわからないことを夜遅くまで喫茶店で話し込んでいた。話をすると、自分一人だけではないということもわかつたし、はき出したら元気が出て、また学校に元気に行くことができた。そうして、サークル不毛の地と言われていた和歌山市に「てのひら作文の会」が新採用の教師たちによって作られた。

ここで「てのひら作文の会」の歩みを少し振り返ってみたい。

「てのひら作文の会」は、1967年11月18日(私が就職して8カ月目)、当時新任の教師たちが、どうにかしてこのしんどさから抜け出したい、どうしたらいいのかわからない、泣きながら必死で創り上げたサークルである。市内の大きな学校で、出くわすものがすべて新しく想像もしていなかったことばかりで、1日1日の教科書をこなすだけで精一杯の状態に置かれていた。それも、学校へ赴任すると、新しい教科書をくれて、さあ、授業をしなさいと言われても、何をどう教えていいのかさっぱりわからなかった。子どもたちはガサガサするし、どうしたらうまく指導できるのか、それが一番の悩みであった。おまけに、職場によっては、新任の先生をあまり大切にしてくれない、言い換えると、先輩の先生がその先生の型に若い先生をはめようと考えているのか、自分のしないことは新任の先生にもさせない、例えば、学級通信を出そうとすると「ストップ」をかけたり、文句を言ったり、宿題プリントやワークブックを学年で揃えるということで全部買わされたり、そんな職場もあった。

また、職員会議では、発言する人がきまわって、大部分の人が沈黙をまもっていたり、学校の先生なのに本を読んで勉強することを知らない先生がたくさんいることを知って私たちはびっくりした。新しい職場のなかで、やかましい子ども、授業中でも立って歩き回る子どもたちに手をやき、一方、教材についても全然わからないし、雑務に追まわられるし、他の先生には気をつかうし、精神的にも肉体的にも疲れ果てててんてこ舞いの生活だった。これが、新任教師の味わう一番つらい味だったと思う。

私たちは、何度も何度も壁にぶち当たったり、とまどったり、時には、泣きそうにもなりながら、いっそのこと先生やめてしまつたらかなとまで考えながら、半年間はその日暮らしの生活をしているうちに過ぎてしまった。目先のことしか考えられない忙しさの連続だった。(第8回、県サークル集會報告)

何度か新任同士が会うと、日頃の学校や学級の悩みをぶちまけ合つた。こんな機会が重なるにつれて、何かひとつ、定期的に集まって勉強せよへんかということで、「てのひら作文の会」は誕生した。「てのひら作

文教育研究サークル」と決まったのは、1968年3月9日で、その後、1969年秋に、もっと親しみやすいサークル名として、「てのひら作文の会」に変わった。

さらに、「作文教育の実践を深め広げるために」ということで、年間目標には、「何をどう書かせるか。〈表現と認識の統一をめざして〉次の6点が記されている。

①子どもの生活のなかから題材を選ぼう。②子どもの声を自分のことばで具体的に、自由に、ありのままに書かそう。③文章の批評、検討、観賞を子どもと一緒にやろう。④作文を学級集団の中に返していこう。⑤児童詩の研究をしよう。⑥子どもたちが作文を書きたくなるような学級集団をつくろう。

事務局体制は、会長(森)、事務局長(川上)、財政、組織、学習、編集などの役割を置き、春と夏には合宿研究会をもち(初めの頃第1回〈杉山守先生〉、第2回〈岡本佳雄先生〉、第3回〈杉山守先生〉、第4回〈中山豊先生、吉川薫雄先生〉、第5回〈田伏通男先生〉、第6回〈松川利幸先生〉、等々、奇数回は春の合宿1泊2日、偶数回は夏2泊3日)、その他のこととして、毎月1回の例会をもち、その反省と次回例会の内容を検討する事務局会議を開き、文集「てのひら」(学期に1回)と機関紙「てのひら」(2カ月に1回)を発行していた。時々、理論の勉強会(例えば、『生活綴り方と教育』小川太郎)を1日かけて、チューターが報告し論議するというような会も開いた。1回の例会の案内は最低2回は発行し、実践報告、教材研究、授業研究を行ってきた。会費は年間200円であった。

例会は、各学校回り持ちで、時には授業も見せるといふものであったので、当該校の校長に各学校への案内状(内容は私たちがつくり)を送ってもらい、出張の依頼もお願いした。初期の頃は官制の研究会そのものも活発でない状態だったので、出張で参加できることが多かった。私の学校で授業を含めての例会をすることについての案内状を送ってほしいと校長にお願いすると、お願いはお願いとして聞いてくれはしたが、授業中おかしなこと(偏向教育)をするようなことがあれば、ストップをかけるということも言われた。おかしなことを指導するようなことはないので、校長先生も授業を見に来てくださいと言っておいた。

私たち「てのひら作文の会」は、和歌山県民間教育サークルとして位置づけ、県サークル連協で明らかにされている概念を大切にしていた。

- ①それは、自らの意志で加入し、参加した会員により、構成されるものである。教科主任であるとか、学校代表であるとかということ加入し、またはさせられたものは、わたしたちのいう民間教育サークルではない。
- ②会員自体によって、はっきり会としての体制を整えていなくてはならない。教委や教組から資金援助を受けても、そのために会がぼやかされたり、

左右されたりすることがあってはならない。

- ③研究活動のめあても、会独自のものをはっきり打ち出し、何ものにも動かされないことが大切である。

そして、私たちは「純民間の誇り」を強調し、大切にしてきた。その「純民間」とは

「純民間は、純民間として生きぬくだけの強い研究と仲間づくりが必要である。」「純民間の純民間たるゆえんは、あらゆる研究を民衆の利益と幸福のために奉仕するということである。そのためには、何ものにもわずらわされぬ研究の自由を確保し、科学としての一般理論を打ち立てることであり、その実践化をめざすことである。そのための広い視野とたゆまぬ研究をすすめるサークルとして、われわれは成長し、仲間をつくっていくべきである。」(藤田五与)

サークルで栄養をつけてもらうことが多くなり、2年目も4年生を担当することになっても、新任の時よりはやや落ち着いて学級活動をすることができるようになった。

5月頃、楠本一郎先生のおうちに呼ばれて行くと、吉川薫雄先生と中山豊先生がおられたように思う。そこで、夏の民間教育研究会の全体会で、「新任教師の1年間の歩みをふりかえって」というテーマで報告して欲しいと言われ、引き受けた。その時、県の民間教育の事務局に入ってほしいということをお願いしたので、承諾した。

教師2年目は、和歌山市教職員組合青年部の常任も引き受けた。こうして、学校とサークルと青年部の三つどもえの活動が始まった。

7月末、高野山で、「部落問題夏期講座」が開かれ、多くの和歌山市の先生が参加した。夜、宿舎で、夏の第8回民間教育の集会で報告する内容をみんなに聞いてもらい、感想や意見をもらって、8月初め、水産会館での研究会で報告した。

1971年夏休み、部落問題研究所が、文学読本「はぐるま」を作ったので、各地で研究会を開いていた。南近畿大会として、県和商で開かれたので、参加したのが、「はぐるま」合宿研究会へのはじめての出会いであった。教科書に「ごんぎつね」がでていたので、「ごんぎつね」の分科会に参加した。

話があっちへいき、こっちへいきしているが、私は毎年「学級通信」と「学級文集」を発行しつづけていた。今から思えば、つたない文集などであるが、出し続けたことが勲章になるのではないかと思う。

1967年11月11日～12日に行われた和歌山県教育研究会、国語教育分科会に提出したレポートがある。少し抜粋してみたいと思う。

詩や作文の指導において、何をこそ書かせるべきか——ねうちのある題材をつかませるために——

1. はじめに——このレポートを作成するにあたって

雑誌などでみると、この頃、先生はあまり作文を書かさないということです。なぜ、子どもたちに作文を書かさないのかなあと、お母さん方はふしぎに思っておられます。一方、文部省では、今度の指導要領の改訂で、作文を増すことになっておるそうです。但し、内容は生活綴り方的な作文ではないそうです。こうした作文をめぐる情勢のなかで、私たち教師は、特に私は、学期に1回や2回の作文に対して、少なからぬ不満もっています。そして、今だからこそ余計、教育における作文の位置を正しくとらえておかなくてはならないのでしょうか。(中略)

子どもたちは、実際に書くことを嫌がるし、例え書いても短いです。だから、「子どもは作文ぎらいだ」と決めてよいのでしょうか。私は、そんな状態をこう理解しています。つまり、子どもたちは、今まで、作文というものについて教育されてきたのであろうか。そして、教師の側についても、作文指導について深く考えたことがあったのでしょうか。どちらでもなかったのではないかと思います。

私は、学生時代に、生活綴り方の勉強、特に理論の勉強を少ししてきました。そして、その理論を実践の中でどう生かすのかと、今まで半年間苦心してきました。そうしたなかで、作文というものをもっと実のある、もっと自分たちの生活と密着したものにしてきました。従って、子どもたちに、詩や作文を書かせる場合、何を書かせたらよいのか、どんな問題を書かせたらよいのか、私自身わかりませんでした。

このレポートは、新任教師が半年間にやっとここまでわかりかけてきたことです。先輩の先生方はもうこの問題については論議され尽くしたところかと思いますが、敢えて報告し、様々な角度からのご批判をお願いします。

2. 具体例を示しながら

(例1) おとうちゃんの足のうら M・W

おとうちゃんの足のうらにたこができています。
白くてかたいたこができています。
ぼくがつねってみると、
おとうちゃんがなんにもないといった。
おとうちゃんは、毎ばん、かみそりでたこを切っている。
切っていたら、あとからうみが出てきた。
ぼくも、たこができたらいやと思った。

この詩を読んで、どんなことを想像するでしょうか。毎晩、風呂に入ったあとで、電灯の下でかみそりで足の裏のたこを切っているおとうさん。それをそばでじっと見ている作者。こういう情景がありありと目に浮かんでくるではありませんか。何でもないお父さんの足の裏が、実に行動をともなっかかれていきます。

しかし、最後の1行の「ぼくも、たこができたらいやと思った」というところを、もっと深めなくてはならない問題ではないでしょうか。この「たこ」こそは、父の労働そのものをさしているのですから。

私は、作文や詩を書かせる時、そのものの姿を見たまま、感じたまま、思ったまま、聞いたまま、ありのままに書くようにとよく言います。しかし、子どもたちの目を通した「ありのまま」は、教科書をそのままってきたような、概念的、観念的なものがほとんどです。

(例2) おかあさん H・M

おかあさんていいなまえ。
おかあさん、おかあさん。
なんにもないが、
おかあさんは、いつもしごとをしてくれている。
おかあさんは、おかあさんになって
どんなにおもっているかな。
わたしは心の中で
おかあさんありがとう。
と、思っている。

(例3) わたしのおとうちゃん N・N

おとうさんはめがねをかけている。
めがねをのけると、ちょっとおかしい。
おとうさんは、
とてもひどくおこる時もある。
でも時々、
とてもやさしい時がある。
だから、おとうさんは、だいすきです。

この子どもたちの父や母に対する本当の気持ちは、これらの詩の中には、出ても来ないし、積極的な父母に対する働きかけもないし、読む者にとっては生き生きしたものを与えません。もっと、お父さんならお父さんの生き生きした姿を多面的につかまえさせなくては、死んだ人になってしまいます。

子どもたちは、往々にして、一つの言葉をまねて使ったり、知らず知らずのうちに、感じもしなかった言葉を平気で使う傾向があると思います。(中略)

子どもたちは、自分の思ったこと、したこと、見たこと、聞いたことなどをありのままに書く自由があります。個々の子どもたちの個性が、世界のどの書にも記されていないという、今更らしい個性を発見した、北方の教師たち。私たちは、今、この北方の教師と同じように、個々の子どもの個性を発見しなくてはならないと思います。

ある時、先輩は、凶工の時間のことを話してくれました。

「人物写生をする時は、顔から描かすのではなくて、足から描かせるのだ。そうすると、子どもたちはびっくりして、今まであまり注意して見たこともなかった足をじっと見つめるであろう。」と。そこに、私は目をつけました。

「家に帰って、家の人の顔や手や足や、その他どこでもいいから、よく見て、詩を書いてきなさい。」と言って書かせたのが次の作品です。(例1もそうして書いたものです。)

(例4) おとうちゃんの手 R・N

おとうちゃん
おとうちゃんの手はおおきいよ。
おとうちゃんの手はくろいよ。

おとうちゃんの手は、けががいっぱいあるよ。
 おとうちゃんの手は、おかあちゃんの顔をたたくよ。
 おとうちゃんの手はおそろしい。
 いまでも
 おかあちゃんや、わたしたちをたたきそうな気持ちになる。
 おとうちゃんの手は、おそろしい。

この子の父は大工です。この詩から、この子の家庭生活までも知り得るのではないのでしょうか。しかし、「おそろしい」という言葉を使わなくても、この「おそろしい」という内容をもっと深く突っ込んで書いてほしいと思います。(中略)

3. まとめとして

私は、作文や詩を指導する時、子どもたちの心からの叫びを大切にしてきました。文章表現は、国語科のなかでは、大きな位置を占めているとおもいますが、特に、どんなものに目を向け、何をこそ書かせねばならないかを追求してきました。そして、同じものを見ても、通り一遍な文ではなく、そのものの本質、内面にまで深くめぐりこんだものを期待しているのです。そのためには、先ず、子どもたちにリアリズムの眼を持たせること、教師自身もリアリストにならないと思います。「おかあさんの手はやさしい」と表現する子どもに、なぜやさしいのか。頭を叩かれ、お尻をぶたれたりしている手が、なぜやさしいと感じるのか、その最後のぎりぎりのところまで、子どもたちを追い込んでいきたいと思っています。そこで、初めて、「おかあさんの手はやさしい」という言葉がなくても、いきいきと生きたお母さんが書かれ、読者に読み応えのある作品ができあがるのではないのでしょうか。既成の概念は、往々にして、本質を隠すペールの役割を果たしています。そのような本質を隠したペールを1枚1枚はがしていく仕事が生活綴り方であると思います。

4. おわりに

私は今年4月、教師になり、実践の経験も浅く、教研集会にも、これが初めての参加です。そんな私のレポートです。雑い内容で、先輩の先生方には、もう理解ずみのものでしょうか。しかし、私は、この教研集会で批判してもらい、これからの実践で色々と確かめていきたいと思っています。(後略)

野崎小学校時代の最後にあたり、2年目から教職員組合和歌山市支部青年部の役員となり、次の年には県教組青年部の役員を引き受け、教研や文化の担当となり、「青年教研」を開催したこと、「青年文化祭典」を開催したことである。第1回の青年教研の記念講演に、大槻健先生をお呼びしたことで、私が基調報告をした。それ以後、私が青年部を卒業しても、青年教研は続けられていった。文化祭典は、各支部での出し物を考えたり、展示や文化講演を行った。(その内容を全国教研山梨大会でレポーターになった。)『霧の旗』や『わらしことおっかあ』(少しあいまい)などの映画会も催した。

県の青年部の活動で忘れられないのは、「新採教員の研修反対の闘い」である。県教育委員会の課長を相手に交渉することも何度もあり、また、有田在住の新採教員の研修担当の家まで押しかけていったりと、無茶な闘いのようなこともかなりしてきた。しかし、後の新採用者たちには喜ばれる闘いであった。免許状取得のための夏のスクーリングの費用の一部を保障させたり、青年教師の賃上げを親組合とともに闘ったり、成果も多い青年部活動であった。

教師3年目、大学時代から交際していた杉 勝代さんと結婚した。「てのひら作文の会」の仲間たちが、実行委員会を作り、「人前結婚(会費制)」をし、岡本佳雄先生に実行委員長、田中資郎先生(和教組書記長)に媒酌人となってもらった。123名の皆さんが参加してくれた。

野崎小学校6年目と7年目は、障害児学級を開設するというので、和歌山市内の小学校を訪問し、野崎小学校らしい学級の青写真を描く2年間であった。私が障害児部の担当だったので、イメージをまとめていた。

7年目の12月、校長から、来年度の障害児学級の担

任になってほしいという声を掛けられた。当時、私は、笠田から車で通っていた。妻も大阪の泉南の小学校へ通っていた。本腰をいれなくてはと、和歌山に引越しをして、障害児学級の担任の決意を固めていた。3月末、校長が内示を持ってきた。それには、松江小学校への異動が告げられた。

そこで、和歌山市教育委員会を相手どり、「不利益提訴」に踏み切った。争うことは好まなかったけれど、ひっこしまでして、和歌山にきたことを強く訴えた。しかし、その年からの方針の「新採5年」という線にひっかかったのだ。

裁判は1年以上続いたが、うやむやのうちに、消えてしまっていた。

1974年(昭和49年)4月、松江小学校へ転動した。(森)

注

- 1) 拙稿「教育政策に対抗する教育実践の構図」中野光・行田稔彦・田村真宏編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、2006年参照。
- 2) 拙稿「生活綴り方と教育方法」恒吉宏典・深澤広明編『授業研究重要用語300の基礎知識』明治図書、1999年参照。
- 3) 全国同和教育研究協議会(全同教)第4回和歌山大会で、小川太郎は、同和教育は和歌山の生活綴り方と結びついた同和教育のあり方と出会ったと指摘している。
- 4) 後に紀南作文教育研究会の中心となる真鍋氏や佐々木氏が創ったサークル。機関誌『明るい学校』『あかるい教育』を参照のこと。
- 5) 佐々木賢太郎著『体育の子』新評論、1956年参照。
- 6) 1964年度の御坊市立御坊小学校5年生の教師集団による『学年新聞大地』参照。
- 7) 全国教研の報告書である『日本の教育』(一ツ橋書房)を参照されたい。
- 8) 河原尚武「紀南作文教育研究会」『戦後同和教育研究』部落問題研究所、1979年。宅田紀子「紀南作文教育研究会の実践の特質」和歌山大学大学院教育学研究科学校教育専修(教育

- 学)編『教育学研究集録』第3号、1997年参照。
- 9) 小川真知子「紀北生活指導研究会の教育実践」和歌山大学大学院教育学研究科学校教育専修(教育学)編『教育学研究集録』第3号、1997年参照。
- 10) 「1962年方針」『生活綴方 その考え方・進め方』百合書房、1992年参照。
- 11) 村山史郎著『生活綴方実践論』青木書店、1990年参照。
- 12) 土屋基規著『教育系学生の指導と行動上・下』明治図書、1967年、『未来の教師』労働旬報社、1974年参照。戦後の大学の教育学部の50年史編纂にかかわって、学生の文化活動・自治活動への言及はほとんど見られないが、神戸大学が独自の記述を行っているのが興味深い。『神戸大学教育学部50年史』を参照されたい。